良いことずくめの話を信じて、

夢と希望に燃えて渡満した

甘い言葉で口説かれ《満蒙開拓団では》

移民団の編成にあたっては、人望の厚い人物(教員や村の顔役）を中心に据え、「満州では広い耕地が支給される」「徴兵は免除される」「国のためになる」などと甘い言葉に勧誘され、あの人が行くのなら、あの人から誘われたんではと説得に応ずる人が多かったのです。

新聞でも、満州に向けて船出して行く団員や「大陸の花嫁」を華々しく英雄的に報じました。満州がいかにすばらしい土地であるか、移民することがいかに幸せなことであるかを、毎日毎日繰り返し報道し、また、現地からの紀行文や視察者の報告に大きく紙面を割いていました。

入植者については最初30歳以下でしたが、中期からは40歳までに引き上げられました。初期には「二男以下」が圧倒的でしたが、急速に「戸主本人」が増加していき、後期には家を上げての移民が一般化しました。

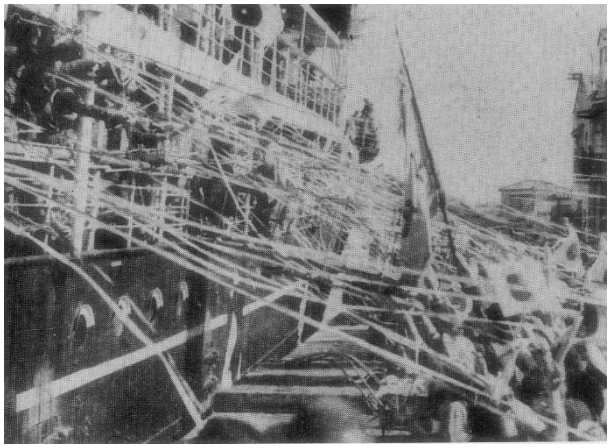
「満州へ行けばなんとかなる」ー狭い土地で冷害や凶作に苦しんだ農民たちにとっては、満州はまさしく“希望の大地”でした。

「満州開拓団」の家族(昭和18年)

炊事場の前に開拓団員が勢ぞろい。皆同じように子どもが幼く、不慣れな土地、不安な治安だったが、お互いに助け合って生活していました。

雪が消えるとすぐ種まき。夏は作物の成長が早い。（写真は『父と母「五福堂」引揚記』より)

青少年義勇軍の出港風景(新潟市・昭和 15 年)



《青少年義勇軍では》

隊員募集に当たっては、初めに各市町村に割当てられ、それに応じて学校を中心に勧誘が行われ応募者を出しました。「お小遣いもでる、土地がもらえる、3年間我慢すれば官吏にもなれる、徴兵も免除される」と良いことずくめで、青少年を釣る募集が行われまし「大陸の拓士」「鍬の戦士」ともてはやされ、応募した少年たちは“お国のために”と信じ、大志を持って満州の大地をめざしたのでした。

入植した現実は、まったく違っていました。父母や兄弟から切り離されて軍隊式の集団生活の中で、厳しい訓練、農作業が行われました。作業の厳しさに加え、故郷を遠く離れての生活に、まだ10代の若者たちは「屯墾病」と呼ばれるホームシックにかかる者が多く、脱走者が後を絶たなかったこともありました。食べ物も、食べたこともない高粱(こうりゃん)、ひえ、あわが主食の貧しい食事でした。当時の学校 教育は、純真な少年たちを満州へ駆り立て、なかには強引な勧誘も行われました。

義勇軍応募動機表

1 教師の指導47. 4%

2、本人の意志34. 4%

3、父兄のすすめ5. 9%

4、その他12. 5%

(昭和 16 年調査『満州開拓史』より)